

胃癌による転移性膀胱腫瘍の1例

帝京大学市原病院泌尿器科 (主任: 伊藤晴夫教授)

植田 健, 三浦 尚人, 鈴木 和浩

鈴木 文夫, 伊野宮秀志, 小竹 忠

西川 泰世, 山口 邦雄, 伊藤 晴夫

METASTATIC BLADDER TUMOR FROM GASTRIC
CARCINOMA: A CASE REPORTTakeshi Ueda, Naoto Miura, Kazuhiro Suzuki,
Fumio Suzuki, Hideshi Inomiya, Tadashi Kotake,
Yasuyo Nishikawa, Kunio Yamaguchi and Haruo Ito*From the Department of Urology, Teikyo University School of Medicine, Ichihara Hospital*

A 63-year-old man with a two-month history of nocturia and dysuria consulted his family doctor. As renal dysfunction and bilateral hydronephrosis were indicated, he was admitted to our hospital on November 28, 1988.

Cystoscopy revealed a non-papillary and flat tumor from the ureteral orifice to the back wall of the bladder. A biopsy of the bladder wall revealed signet-ring cell carcinoma. A metastatic bladder tumor was suspected and laboratory tests of tumor markers showed an carcinoembryonic antigen value (CEA) of 1,000 ng/ml and CA19-9 of 12,210 U/ml. Upper gastrointestinal examination revealed carcinomatosis involving the stomach. A biopsy specimen of the stomach revealed the same pathological finding as the bladder wall. A metastatic bladder tumor was confirmed. The patient died of pulmonary emboli on December 11, 1988.

(Acta Urol. Jpn. 38: 1175-1177, 1992)

Key words: Gastric carcinoma, Metastatic bladder tumor

緒 言

膀胱における原発腫瘍以外の腫瘍は、直腸癌や子宮癌の直接浸潤によるものが多く、他臓器悪性腫瘍の遠隔転移は稀である。今回われわれは、消化器症状を示さない胃癌による転移性膀胱腫瘍を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者: 63歳, 男性, 機械工

主訴: 夜間頻尿, 排尿困難

家族歴: 特記すべきことなし

既往歴: 1983年より高血圧

現病歴: 1988年10月より夜間頻尿, 排尿困難が出現し, しだいに乏尿となった。近医受診し, 両側水腎症と腎不全を指摘された。紹介にて1988年11月28日当科受診した。膀胱鏡にて膀胱三角部から後壁にかけて浮

腫状の広基性腫瘍を認めた。精査目的で入院となった。

入院時現症: 体格中等度, 栄養状態良好, 血圧 150/90, 脈拍数 72/分 整。胸腹部理学的所見に異常を認めなかった。外性器・前立腺・直腸に異常所見を認めなかった。消化器症状の訴えはなかった。

入院時検査成績: 血液一般では, Hb 10.1 g/dl, Ht 31.2%と貧血を認め, 白血球が軽度上昇していた。血液生化学で BUN, Cr, UA, K が高値を示し, Na が低値を示した。

尿一般 pH 5.5, 蛋白 (+), 糖 (-), 潜血 (3+); 沈渣, 赤血球, 多数/l 視, 白血球, 10~15/l 視, 尿細胞診 class II。

入 院 後 経 過

入院後ただちに腎後性腎不全改善目的に, 右腎への経皮的腎瘻造設術を施行した。

胸腹部単純撮影にて異常所見を認めなかった。

腹部超音波検査にて、両側に中等度の水腎、中等量腹水および大動脈周囲のリンパ節の腫大を認めた。腹部CTの所見は、腹部超音波の検査所見を裏付けるものであった。

腎不全改善後の1988年12月9日膀胱腫瘍精査目的で膀胱生検を施行した。病理所見で、粘膜下層から固有筋層にかけて印環細胞を伴う腺癌の浸潤を認めた (Fig. 1)。消化器癌の膀胱転移を疑い、腫瘍マーカー

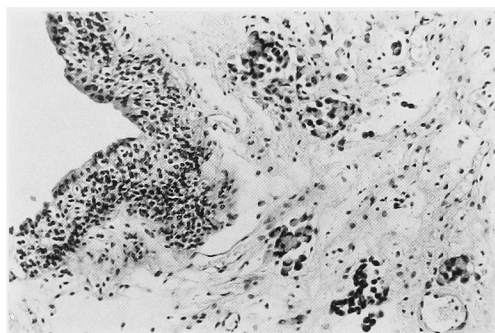


Fig. 1. Specimen of bladder biopsy demonstrates signet-ring cell carcinoma resembling that of gastric carcinoma. H.E. $\times 50$

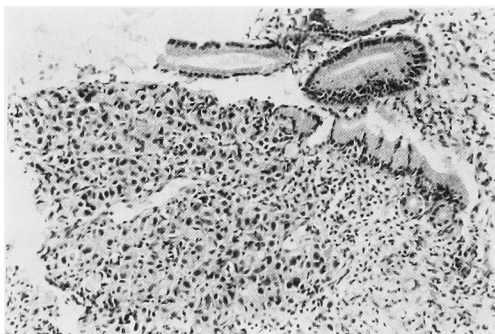


Fig. 2. Microscopic findings show gastric adenocarcinoma containing signet-ring cells. H.E. $\times 50$

を検索したところ、CEAが1,000 ng/ml, CA19-9が12,210 U/mlと高値であったため、消化器の精査を行った。腹水を認めたが、穿刺は行わなかった。上部消化管造影にて胃体部大弯側に潰瘍と粘膜ひだの集中を認めた。同時に施行した胃内視鏡による生検にて印環細胞を伴う低分化腺癌が確認され、これが膀胱生検による組織と同様の所見であったため、胃癌の膀胱転移と診断した (Fig. 2)。患者は、1988年12月11日

に呼吸器不全にて死亡した。

剖検では著明な癌性腹膜炎を伴い、胃体部大弯側に直径3 cmの腫瘍を認め、傍大動脈、腎基部のリンパ節への転移に認めた。また、後腹膜および骨盤内の脂肪組織へも腫瘍の浸潤がみられ、両側の尿管を閉塞していた。直接の死因は肺動脈栓塞であった。

考 察

膀胱における原発腫瘍以外の腫瘍のほとんどは、直腸や子宮などの隣接臓器からの直接浸潤であり、肺・胃・肝臓・腎¹⁾などの遠隔臓器からの転移は少ない。転移性膀胱腫瘍は膀胱腫瘍全体の6.2%を占めるのみである²⁾。胃癌の膀胱転移はGoldstein³⁾の剖検例において553例中13例、本邦では森ら⁴⁾が176例中2例と報告している。また、Goldstein³⁾は、146例の転移性膀胱腫瘍を集計し、悪性リンパ腫55例について胃癌が34例と2番目に多いと報告しており、Ganem⁵⁾も80例の転移性膀胱腫瘍中25例は胃癌が原発巣であると報告している。転移形式は血行性、リンパ行性、腹腔内播種が考えられるが、血行性転移は、有吉ら⁶⁾が報告し、リンパ行性転移は市川⁷⁾、小田ら⁸⁾、橋本ら⁹⁾が報告しているが、ほとんどが腹腔内播種による転移であった。本症例は、剖検にて著明な癌性腹膜炎とSchnitzler転移を認めているため、腹腔内播種が膀胱への転移の原因と思われた。

Hermann¹⁰⁾は剖検にて、女性胃癌患者10例中4例でKrukenberg腫瘍が認められ、その4例すべてに膀胱転移を認めたのに対して、男性では10例中1例に認めるにすぎないことから、膀胱転移には卵巢の重要性を指摘しており、奥野ら¹¹⁾の報告もこの事を裏付けている。

今回われわれの症例を加え、本邦で32例集計しえた。年齢分布は21歳から77歳であり、平均年齢は55歳であった。男性16例、女性16例と男女比は1対1であり男女差をみなかった。

主訴では、血尿が最も多く32例中18例56%に認められ、頻尿11例34%、排尿痛5例16%の順であったが、これらの症状は原発性膀胱腫瘍と比較するとやや低い頻度である。それは転移性膀胱腫瘍は筋層浸潤から起こるためであり、病期が進行し粘膜におよんで潰瘍形成を起こして初めて膀胱刺激症状となるからであり、消化器症状を呈した症例は比較的少なく、自験例を含めた11例でまったく認められていない。

胃癌で胃切除術を受けた後、膀胱転移による血尿・排尿困難・頻尿などの症状出現で泌尿器科受診までの平均期間は22カ月であった。

膀胱鏡所見で, 腫瘍の好発部位は, 膀胱頂部が14例(44%)と最も多く, 膀胱三角部から膀胱後壁にかけて8例(25%)であり, 側壁は3例(9.4%)と少ない。肉眼的形態は, 膀胱粘膜は浮腫状であり, 非乳頭状・広基性を呈しているのが10例と多い。病理所見では25例(78%)が腺癌で最も多かった。

既往歴で, 胃癌の治療として胃切除術を施行している例は, 記載をしてある26例中20例あった。膀胱腫瘍の鑑別診断上, 転移性膀胱腫瘍は重要であると思われる。自験例では膀胱生検により印環細胞を認め, CEAやCA19-9の腫瘍マーカーや上部消化管造影によって胃癌の膀胱転移と診断できた。

治療では, 膀胱腫瘍で発見された場合, 腫瘍がすでに腹腔内播腫や他臓器転移している例が多く根治的な治療が難しいものと思われる。腹腔内播腫を伴わないで孤立性に転移し, 術前に確定診断がつき根治性が期待できるのは奥野¹¹⁾の報告のみであった。施行された手術法は, 膀胱部分切除10例, 尿管皮膚瘻6例, 試験開腹4例, 膀胱全摘術3例, 腎瘻造設2例などであった。このように, 対症的治療にならざるをえず, 予後不良である。

Oosterwitz¹²⁾は泌尿器科的症状が出現すると3ヵ月以内に死亡すると述べている。予後記載のある症例19例中3例の生存しか報告されておらず, 他の16例は, 平均4.9ヵ月で死亡している。自験例も当科受診3週後に死亡した。

結 語

63歳男性にみられた胃癌による転移性膀胱腫瘍の1例を報告し, 若干の文献的考察を加えた。本症例は, 第470回日本泌尿器科学会東京地方会にて, 著者の1人である伊野宮秀志が報告した。

文 献

- 1) 谷川克己, 松下一男: 腎細胞癌の膀胱転移の1例. 泌尿紀要 36: 927-929, 1990
- 2) 市川篤二, 膀胱腫瘍の遠隔成績調査. 日泌尿会誌 49: 602-610, 1958
- 3) Goldstein AG: Metastatic carcinoma to the bladder. J Urol 98: 209-215, 1967
- 4) 森 亘, 岡部治男, 太田邦男: 悪性腫瘍剖検例755例の解析. 癌の臨床 9: 351-354, 1963
- 5) Ganem EJ and Batal JT: Secondary malignant tumors of the metastatic from primary foci in distant organs. J Urol 75: 965-972, 1956
- 6) Ariyoshi A, Fujisawa Y and Murayama H: A case of carcinoma selectivity metastasized to the urinary tract. Acta Urol Jpn 24: 743-745, 1978
- 7) 市川武城: 胃癌より転移したと思われる膀胱癌の1例. 皮膚と泌尿 15: 274, 1953
- 8) 小田完五, 中尾栄三, 原田 稔: 胃癌転移による続発性膀胱腫瘍. 日泌尿会誌 52: 241-244, 1961
- 9) 橋本紳一, 後藤健太郎, 清水英男: 胃癌による転移性膀胱腫瘍の1例. 泌尿紀要 35: 1929-1933, 1989
- 10) Hermann HB: Metastatic tumors of the urinary bladder originating from the carcinoma of the gastro-intestinal tract. J Urol 22: 257-273, 1930
- 11) 奥野 博, 岡本圭生, 岡本英一: 胃癌膀胱転移の1例. 臨泌 47: 871-873, 1991
- 12) Osterwitz H and Dick G: Ureteral obstruction as primary manifestation of metastasizing gastric carcinoma. Int Urol Nephrol 13: 123-126, 1986

(Received on January 30, 1992)
(Accepted on April 25, 1992)